

# いつか羽ばたくための モノローグ

1

鈴野しずね

## プロローグ

---

「イメージ雑感」

始まりは海の底

深い海の底で生まれた泡が ゆっくり上昇し始める

漆黒のブルーが いろいろな音色によって グラデーションに変えられていく

だんだん明るくなっていく

ふと気づくと ブルーが 千代紙の和柄に変わっている

やがて

心の扉をノックしているような音たちに連れられて

いつしか まだ誰も登ったことの無い山脈を 空から俯瞰している

そして

更に上昇して 満天の星々の間を巡り始める

深度から高度 そして光年へと繋がっていく旅に誘う 彼方からの風

---

これはあるインスト曲を聴いたときの私の感想、曲のイメージ。

音楽を聴くと、心の中にいろいろな色や形、映像みたいなものが浮かんでくる。

これが私。

共感覚という感性を持っている私のありのまま。

## 「共感覚」という言葉との出会い

---

無色な砂色

色に成れない砂の粒

ざらざらの砂嵐砂雨砂雪

--この記事の色彩--

---

何か違うなとは感じていた、他人と。

でも、あの日からずっと放心状態だった。

全身から力が抜け崩れ落ち、立ち直れないまま時だけが過ぎてしまった。

知らなかった、ずっと気がつかなかった。

それは、瞬きすることや呼吸することと同じで当たり前だから、意識したことなんて全く無かった。

だから自分が何に反応するのかということもよく知らない。

私は今までいったいどんなことを口走ってきたのだろうか？

自分の無防備さに、顔が熱くなるような消えてしまいたいような気持ちになる。

それは春のある週末。

昼下がりのTV。

私はそこで初めて「共感覚」という言葉と出会った。

TVで共感覚を持った人がしゃべっていたのだった。

私にとってその人の話の内容は特に珍しいと感じるものではなく、その思考回路もなんとなくわかるような気がしていた。

でもそれを聞いている共演者の人達は、その人の一言一言に驚いていた。

私は、彼らが驚いていることにむしろ驚いてしまった。

だって、誰でもそんな感じ方をしているんじゃないの？

なのにどうしてそんなに驚くの？？？

なんだか底知れない不安の中に引きずり込まれた。

「共感覚」っていうんだ。

こんな大げさな名前がついていたなんて。

すぐにウィキペディアで調べた。

長い解説を読み進みながら、自分に当てはまることがあるように感じて血の気が引いていった。

。。

[「共感覚」](#)（「ウィキペディアWikipedia：フリー百科事典」より一部引用）

共感覚（きょうかんかく、シナスタジア、synesthesia, synæsthesia）とは、ある刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる一部の人にみられる特殊な知覚現象を

いう。例えば、共感覚を持つ人には文字に色を感じたり、音に色を感じたり、形に味を感じたりする。

私は、音楽以外にも反応しているのだろうか？

絵は？

以前見た展覧会の絵。

キャンバスに塗られた絵の具のひとつひとつが、絵筆の痕跡だと思った。

その痕跡の先には、絵筆が見えるような気がした。

そしてそれを持つ指先を感じ、その画家の息遣いまで感じるような気がした。

彼の表情が見えるような気がした

痕跡のひとつひとつから、彼の情念が感じられ、それに自分が巻き込まれていきそうになった。

自分の中で、何かが振動し始めて彼の情念に引きずり込まれるような感覚になった。

それは音楽を聴いた時のものと同じような気がする。

でもその絵のそれは、楽しい感じのものではなかった。

それ以来、展覧会に行きたいとは思わなくなった。

趣味で描いている人の絵も、同じだった。

何気に入ってしまった、絵の展示即売会。

シンプルな額に入れられた、水彩で描かれた花の絵は、玄関やちょっとしたスペースには、おしゃれなインテリアになるのだろう。

でもそれらの絵からは、「どう？上手いだろう、センスあるだろう」という押し付けがましき傲慢さが、透けて見えるような気がした。

そこから離れた時、ものすごくイライラしている自分に驚いたのだった。

だから、今も絵画は見たくない。

なぜ自分がこんなことを感じるのか、わからない。

この感覚がなんなのかもわからない。

みんなそうだと思っていた。

違うのだろうか？

私には、こういう感覚が他にもあるのだろうか？

私はいったい何者なのか？

どういう人間なんだ？

そんなことすらわからない私はいったいどうすればいいのか、、、

考えても考えてもわからない。

そんな関係の本を読んでも、そこにはどういう感覚があるのか説明しているだけで、肝心なことは、何も教えてはくれない。

私が知りたいのは、私がどんな感覚を持っているのか、或いは持っていないのかという事だけなのに。

今まであまりに無防備に自分の言葉を垂れ流してきてしまった、そういう思いが、私に音楽を聴けなくさせてしまった。

流れる音楽にふっと意識がいく時、そこに何か見えるのか？色は？映像は？と考えてしまうようになってしまった。

疲れる。

神経がピリピリしてくる。

今まで意識してなかったものを、無理やり明るいところに引きずり出そうとしている感じで、とても疲れる。

だからいつしか音楽を聴かなくなっていた。

でも頭の中に、ごく自然に流れていることがある。

私はどうしたいのか？

どうなりたいのか、、、？

わかってもらえない

---

ほとんど黒な緑

風の夜、雪の下から見え隠れするヒマラヤ杉の葉の緑

水墨の世界で 緑に見立てられた墨の色

--この記事の色彩--

---

ずっと

気づかなかった、、、

耳を塞いでいても 目を閉じていても

聞えてくるもの 見えるものが

在る

耳を澄ますと 違う景色が見え

目を凝らすと 別の音色が聞こてくる

それが嫌ではないけれど

嫌いではないのに

わかってはもらえない

ずっと

人の群を眺めているのが好きだった

雑踏を歩くのが好きだった

でも

そこに 私と同じ人種はいたのだろうか、、、

私はいったい誰？

ナニモノ？

私は知らない 私を

砂漠から抜け出そうと

いちばん高い砂丘を登り切ったのに

その先にはもっと果てない砂漠が広がっていた

私は今まで何をやっていたのか

なぜ

私から生まれるイメージは 私を救わない？

だから

聞かない

音楽を聴けない

今は

---

私は孤独だった。

子供のころから、何か人と違うなとは感じていた。

それが何なのか、ずっとわからないままだった。

そして、

共感覚という言葉を知った後も、私を取り巻くものが劇的に変わることは全く無く、、。

私自身さえも。。。。。

## モノローグ

---

。 。 。 。 。

だからモノローグ  
空に語りかけるモノローグ

私は翼を持っていないから  
自分の言葉がいつか鳥になるように  
大空を自由に飛びイメージを描きながら語り続ける  
詩という形のモノローグ

---

「モノローグ」

まだ太陽が顔を出さない 夜明け前のひとときは  
目をつぶったままでいるの  
生身の自分と 深海の自分との隙間が あり過ぎて  
体温が上がってくれないから

生ぬるい 昼間のひとときは  
雨上がりの交差点を ふわふわと見おろしているの  
濡れたアスファルトの ぼやけた赤がグリーンに変わって 日常が動き出す  
そんなシーンに 私はなくて  
どのシーンにも 私はなくて  
エキストラにもなれずに ふわふわと眺めているばかりで

シンとした 冷やかな夜のひとときは  
隙間を 縮めてみたくなるの  
生身の自分と 深海の自分との間に 天の川置いて  
ほんのひとときだけの ランデブー  
だけどそんなシーンを 自分で笑って かき消していく  
天の川なんて 無数の瓦礫に過ぎないだらって

だから瓦礫の隙間を 花の色の砂利で埋めていくの  
終わりが来ても きっとやめない  
埋め続けていくの

たぶん 大地になるまで

## いつか羽ばたくためのモノログ 1

<http://p.booklog.jp/book/20246>

著者：鈴野しずね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shizushizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20246>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20246>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.